



泥棒と間違えられ派出所に引つ張られたことがあります。これは昭和二十年、終戦後間もないころだったと思います。私が京都で両洋中学の校内に住んでいたときです。ある晩、真夜中に「開ける、開ける」と大きな声を出して私の住んでいる入口の戸をどんどん叩くのです。それで私が戸を開けるとそこに二人の巡査がいて、いきなり出て来いといって引つ張られ、履物をはく間もないどころか、裸足のまま派出所に引つ張られて行ったのです。そして一人の巡査は私を見張って残り、一人はどこかに出て行ってしまったのです。私は泥棒ではないといって、私を見張っている巡査に速記の話をして聞かせたのです。だんだん熱心に聞いたので私が泥棒ではないようだと思いがついた様子でした。その間、どの位かかったでしょうか、三十分以上もかかったでしょう。私を残して出て行った巡査が私の近所に住んでおられた坂本さんか、兄弟といっしょに戻って来て、戻ってくるなり、手をついてあやまるのです。坂本さんを尋ねて私が泥棒でないことがわかったのだそうです。なんでも泥棒が校内に逃げ込み、私の住んでいるところに逃げて入口の戸を閉めたと思ったらしいのです。こういう目にあつたことは生涯一度もなかったのでよく覚えていたのです。